

平成 26 年 7 月

一般社団法人全国日本語学校連合会

私の中国 昨日・今日・明日 〈第 2 回〉

「私の二人の恩師—後藤新平と新渡戸稲造」「指導者の信念を支える原動力は信仰」

—李登輝元総統講演—

台湾の李登輝元総統は今年九十一歳の高齢にも関わらず、台湾各地を回り、台湾の第二次民主改革、さらには日台関係などについて講演している。その精力的な姿にはなんとしても台湾を確固たる独立主権国家にしたいという熱情と日本に対する強い期待と思いが感じられる。

その講演の一つ、「私の二人の恩師—後藤新平と新渡戸稲造」と題する講演はこれまで話したことを整理し、新たに組み立て直したいわば新作。日本統治時代に日本がいかに真摯に台湾建設を進めたかを明らかにし、さらには京都大学農学部を志したのは新渡戸稲造の影響だったことを初めて明らかにするなど李登輝元総統の精神形成の過程を自ら紹介している。以下は李登輝元総統が渾身の力を込めて語った講演の全録である。

### 「後藤は私の先生」と講演

本日は台湾と日本との関わり、そして私、李登輝の人間形成に大きな影響を与えた二人の日本人をテーマとしてお話しをしたいと思います。

二〇〇七年五月、私は家族とともに日本を訪れ、「奥の細道」を散策する機会を得ましたが、この訪日にはもう一つの目的がありました。光栄にも、藤原書店が創設した「後藤新平賞」の第一回受賞者として選ばれ、授賞式に出席することになったのです。

授賞式の席上、「後藤新平と私」と題した記念講演を行い、「後藤は私の先生です」と述べました。とは言っても、民政長官として後藤が辣腕を振るった一九〇〇年代初頭に、私はまだ生まれておりません。後藤と私が生きている時代には、実に二世代にわたる開きがあるのです。

一八九五年の下関条約で日本は清朝から台湾を割譲されましたが、初代総督の樺山資紀から三代目の乃木希典までの間、「台湾の開発は端緒についた」という状態でした。内務省衛生局長時代に児玉源太郎の目に留まった後藤は、第四代台湾総督となった児玉に呼ばれるかたちで台湾に渡ります。その後、民政長官として在任した九年あまりの間、後藤は指導者としての力量を遺憾なく発揮し、台湾は未開発社会から近代社会へと、「一世紀にも等しい」と言われるほどの開発と発展を遂げたのです。

台湾全島を視察した新渡戸

その後藤が台湾発展のカギを握る人物の一人として台湾へ招聘したのが、同じく岩手県出身だった新渡戸稲造でした。二年越しともいわれる要請に応じて新渡戸が台湾へ渡ったのは、一九〇一年二月。日本が台湾を領有して六年が経過していた頃でした。

前年の一九〇〇年には、アメリカで『Bushido : The Soul of Japan』が刊行され、セオドア・ルーズベルト大統領の絶賛を受けたほか、諸外国に翻訳されて大反響を巻き起こしていました。日本語版の『武士道』が刊行されるのは数年後のことです。

総督府技師として赴任した三十九歳の新渡戸は、五月に民政局殖産課長となり、台湾全土を視察して歩いたことで、殖産興業の要は製糖業にあるのではないかと思ひ当たります。また、パリで開かれた万国博覧会へ出席した帰途、ジャワ島に立ち寄って糖業事業を調査し、台湾の発展に製糖業が大きく寄与するとの確信を得るのです。

そして、九月には早くも「糖業改良意見書」を書き上げ、この意見書が児玉総督や後藤民政長官の支持を得て、台湾製糖業発展の基本方針が決定されたのでした。

実は、この頃の台湾における製糖業は徐々に衰退していました。しかし、新渡戸はその原因が労働力の欠如や課税という人為的なものに起因するものと分析し、政策いかんによっては、台湾の糖業を発展させることは可能であるとみたのです。そして、そのための対策が意見書に盛り込まれていました。

## 武士道の「実践躬行」の人

新渡戸の意見書を受けた児玉総督は翌年六月に台湾臨時糖務局を設置し、新渡戸を局長に任命します。同時に台湾総督府は意見書を元に起草した「糖業奨励規則」を發布し、これが後の台湾糖業発展の指針となっていくのです。

この「糖業奨励規則」の特徴は、サトウキビ栽培や製糖に従事する者にさまざまな面で補助を与えていることにありました。清朝時代から、米や樟脳と並んで台湾を支えてきた重要産業の一つである糖業を、さらに発展させようという総督府の期待のほどが窺えます。

話は前後しますが、後藤新平が新渡戸稲造に台湾行きを要請した頃、新渡戸はアメリカに滞在していて、その体調は決して芳しいものではありませんでした。しかし、台湾に赴任した後は命がけて「台湾糖業の発展」という大事業に全神経を傾けたのです。「義を見てせざるは勇なきなり」。これぞ「武士道」の精神といわずして何でありましょうか。新渡戸稲造はまさに武士道の道が意味する「実践躬行」の人であったといえるでしょう。

新渡戸は、自身の建議によって設置された臨時糖務局の局長に就任し、製糖事業の指揮をとり始めます。彼の構想は、それまでの小規模かつ旧来型の耕作方法から新しい方法への転換を奨励することにあります。

## 私心を捨て公に尽くす

サトウキビ農家には補助金を支給し、品種改良や灌漑施設の整備など、耕作意欲を刺激する政策を進めましたが、同時に、機械化された大規模な製糖工場の建設を促し、従来の手作業を主とした製糖作業の機械化を推進します。いわば農業と工業の両面から発展させたのです。

一九〇三年、新渡戸は兼任で京都帝国大学法科大学教授となり、台湾での経験を踏まえた植民政策講座を受け持つこととなります。翌年、正式に台湾総督府を離職したため、台湾において心血を注いだのは三年あまりに過ぎません。

とはいえ、新渡戸の意見書によって土台が築かれた製糖業は一九〇二年の生産高が五〇万トンあまりだったのが、一九〇五年には一三〇万トン近くに激増しています。これは、大規模な製糖工場が続々と建設された結果であり、その後、製糖業は台湾の産業において重要な位置を占めるようになっていくのです。

一九四〇年代には、生産量が国内消費量を上回り、完全な過剰生産になるほどに発展したことで、台湾は砂糖の産地として世界にその名を轟かせるようになります。おかげで台湾、とくに南部は製糖業によって潤い、急速な発展を遂げた地域も少なくありません。今日の台湾の発展を語るうえで、糖業を抜きにして語ることは不可能です。これは新渡戸が私心を捨て、公のために尽くしたおかげといっても過言ではないでしょう。

## カーライルの『衣服哲学』読む

ここで私と新渡戸稲造の出会いについてお話ししましょう。

私は一九二三年、台北郊外の三芝で生まれ、純粋な日本の教育を受けて育ちました。少年時代から高校時代まで、古今東西の先人による書物や言葉にふんだんに接する機会を得ましたが、これは当時の教養を重視する日本の教育や学校システムによる賜物であると感謝しています。

台北高等学校在学中、トマス・カーライルの『衣服哲学』を原文の英語で読まされる授業がありました。その日本語訳を少しだけ引用してみましよう。

「このようにして『永遠の否定』は、私の存在の、私の自我の、隅々まで命令するように響き渡っていたが、私の全自我が神に創造された本来の威厳を備えて立ち上がり、力強くその抗議を述べたのはその時だったのである」

日本語訳でも非常に難解な文章ではありませんか。しかし当時、「自我」や「死ぬということ」について答えを求め続けていた私には、その大意が身に沁みて来るように感じられてならなかったのです。そこで、「もっと深く知りたい」という衝動に駆られた私は、台北市内の書店や図書館を歩きまわり、内外の関連書を読みあさったものの、「これは」というものに出会うことができず途方に控えていました。

## 新渡戸の影響で京大志願

そんなある日、台北市内で最大の公立図書館で一冊の「講義録」を偶然に手にとりました。それは、台湾総督府に在籍して台湾の製糖業発展に多大な貢献をした新渡戸の手によるもので

した。新渡戸は毎年夏、台湾の製糖業に従事している若きエリートたちを軽井沢に集めて特別ゼミを開いていたことがあり、その中心教材としてカーライルの『衣服哲学』が取り上げられていたのです。

黄色く変色した新渡戸の「講義録」を読み返しているうちに、原書では咀嚼しきれなかった「永遠の否定から永遠の肯定への昇華」の意味がスーッと理解出来ていくのを感じました。懇切丁寧な「講義録」を精読することにより、私が少年時代から見つめ続けてきた、自分の内面にある「人間はなぜ死ぬのか」「生きるとはどういうことか」という「メメント・モリ」、つまり死生観に対する苦悩が氷解していくのを実感したのです。

この時、新渡戸稲造という日本人の偉大さに心底、感服したことを覚えています。そしてこの感激は、私自身の進路に大きな影響を及ぼしました。かつて新渡戸が専攻した「農業経済」という学問分野を私も究めてみたいと望むようになり、迷うことなく進学先を京都帝国大学農学部農林経済学科と決めました。昭和十七年秋のことでした。

### 「武士道」でいっそう心服

大学進学と前後して、新渡戸の農業経済学における代表的論文『農政講義』をはじめ、あらゆる著書や論文を洗いざらい読み込みましたが、その過程で出逢ったのが、国際的にも大きな評価を得ていた『武士道』でした。これにより、私はよりいっそう新渡戸稲造に心服するようになるのです。

「日本人はいかにして道德教育を施しているのか」という問いに答えるかたちで日本人の精神を解き明かした『武士道』の著者が、その一方でカーライルの難解な西洋哲学を解き明かしている。

それは大きな度量と人間の深さを物語ると同時に、「国際人」として新渡戸が持つ世界の広さを示したといえ、改めて新渡戸に感銘したのです。

新渡戸稲造は敬虔なクリスチャンでもありました。彼が学んだ札幌農学校ではウィリアム・クラーク博士の「物質的な発展や近代化も必要だが、国づくりの根幹はあくまでも人間にある。それゆえに、最も重要なのは人間の精神的な成長や発展である」という固い信念を下地にした倫理教育が施されており、それに感化された新渡戸は当然のようにキリスト教の洗礼を受けたのです。

### 信念を支える原動力は信仰

かくいう私もクリスチャンです。一九八八年一月、蔣経国総統の突然の死去によって、台湾の総統に就任してからの十二年間、一日として気の休まる日はありませんでした。

私には頼れる人も、後ろ盾となる派閥も、情報機関や軍の支持も一切ありませんでした。ただ、キリスト教という強烈な信仰がありました。この信仰によって、あらゆる困難を排除し、台湾の民主化を成し遂げる信念を持つことができたのです。

私がつねづね「指導者は信仰を持たなければならない」と主張する理由はここにあります。強い信仰を持たなければ、あらゆる問題に恐れを生じ、それを突破することに躊躇が生じるからです。指導者の信念を支える原動力は信仰にほかならない。これは、私の長い政治生活で得た実感なのです。

後藤新平が台湾で民政長官を務めた以外に東京市長や満鉄総裁を歴任したように、私も台北市長、台湾省主席の時代に都市経営や農村建設を全力でやってきました。

また、後藤が築いた基礎をもとに私は新しい台湾を模索し、民主化を促進したことを考えると、後藤と私は決して無縁ではないと思っております。

では、後藤が信仰していた宗教は何かというと、私にはわかりません。ただ、何らかの信仰を持っていたことは十分に想像できます。それは宗教ではなく、あるいは天皇に対する忠誠、国家に対する信念というものだったのかもしれませんが、しかし、人間は自分自身を超越する何かを信じることなしに、強い心を保持し得ることは不可能なのです。

### 指導者は私心を捨て去れ

指導者となるべき人は、個人や権力にとらわれてはなりません。指導者に必要なのは「私」の心を捨て去り「公」のために奉仕する「私は私でない私」という信念です。

後藤新平と新渡戸稲造。この二人の日本人は「公のために尽くすことにこそ、人間は生きる価値がある」という無私の心で台湾の近代化に貢献してくれました。そして私には「強い信念と信仰心を持ちなさい」と教えてくれました。こうしたところに、私はこの二人との精神的なつながりを持っていると感じています。

その意味で、二人は台湾近代化の恩人であると同時に、後藤新平は私にとって「リーダーとしての先生」であり、新渡戸稲造は「人生の先生」であると言えるのです。

これで本日のお話を終わります。ご清聴ありがとうございました。（文責・迫田勝敏）

